

14. 外来食品に関する史的考察 (I)

明治初期の牛乳および乳製品

昭和女子大 高垣 孝子

1 明治初期以来、欧米諸外国からわが国に渡来した食品はかなり多数であるが、その中から牛乳および乳製品をとり上げ、成分・滋養価値・用途・製法その他普及の状況などをつまびらかにし、従来あまり調査されなかった食品の動態を詳細に調べて、近代食物史の成立に寄与したい。

2 明治2年2月より明治10年9月までの9年間における東京日日・郵便報知・横浜毎日・朝野・京都ほか数紙の新聞を資料として関係事項68を検出し、これを栄養学・栄養化学・食品学・食品化学・食品加工学・調理学・食餌学・食品衛生学・食品経済学・食習慣の10項に分類整理し、明治初期の牛乳と乳製品の消長を実証的に究明した。なお新聞以外の雑誌も出来る限り調査資料とした。

3 生後3カ月過ぎたら牛乳の方がよいという明治初期にみえる先進的記述、更に「乏しき者に……良品なり」と。こうした中での賛否論争の展開は、隔世の感がするが過渡期的現象として興味をひく。また「乳牛ヲ名トシ牧畜ニ紛敷儀一切不相成候事」は牛乳業発達の側面史ともいえよう。明治8年以降には貯蔵法が検討され、また効能の宣伝は苦心が払われた。乳製品は数種記されている。

通覧すると対象期は欧米模倣時代であり、わが国独自の発展はみられず、業者も少なかった。しかし明治10年頃になると需要が次第に増加している。これは次期におけるわが国酪農の発展を示唆するものといえよう。